

文学的文章の「読み」の授業におけるコミュニケーション能力の育成
—第3学年「三年とうげ」の授業実践の分析・考察をもとに—

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース
P09076F
小山 祐示

I 研究報告書の構成

- 第1章 問題の所在と研究の目的・方法
- 第2章 学習活動におけるコミュニケーション
- 第3章 文学的文章の「読み」の授業における
コミュニケーション
- 第4章 実習校における授業実践の分析と考察
- 第5章 総括と今後の課題

II 研究の概要

本研究では、文学的文章の「読み」の授業において、児童のコミュニケーション能力を育成することを研究の目的として、先行研究を手がかりに、筆者の授業実践を分析・考察した。

はじめに、問題の所在として2点を挙げた。

1点目は、児童をはじめとして社会全体の言葉の乱れである。例を挙げると、「ヤバイ」に代表される流行している言葉がある。このような多義的な言葉には、話し手の意図をつかみ損ねてしまう危険性がある。また、語彙力の低下により、自己の気持ちを他人に伝えられないことで、人間関係のトラブルが起りうることを指摘した。

2点目は、今日の文学的文章の読みの授業の現状である。今日の授業は、教師の解釈により、あらかじめ用意された「主題」や「心情」を与えられる授業である。これでは、児童のコミュニケーション能力を育成することはできない。

そこで、国語科の単元の多くを占める「読むこと」領域において行われている、意見や考えを伝え合い、話し合う等の活動が児童にとって有益なものになれば、コミュニケーション能力の育成につながるのではないかと仮定した。

まず、コミュニケーションを以下のように定義づけた。

他者や事物とのかかわりの中で、自己を見つめ直し、新しい自己を再構築するとともに、他者や事物との関係を形成・深化していくもの

そして、学習活動におけるコミュニケーションを、ヤコブソン(1960)・村松賢一(1998)らの先行研究から明らかにした。

次に、国語科におけるコミュニケーションについて考察した。国語科、「読むこと」領域、文学的文章と焦点化していき、文学的文章の「読み」の授業で行われているコミュニケーションの位置づけと種類を、高橋俊三(1996)らの先行研究から明らかにした。

授業実践の分析・考察を行う視点を、東京都青年国語研究会(2001)の「学習コミュニケーション」の【事柄とのかかわり】と【他者とのかかわり】にもとづき、「テキストとの対話」と「詩的效果」・「予測不可能事象」の2点に絞った。

「テキストとの対話」はワークシートと逐語記録から、「詩的效果」・「予測不可能事象」は逐語記録から、それぞれ分析・考察を行った。

Ⅲ 授業実践の分析・考察

児童の多くは、本文の叙述に着目し、それを根拠にして考えを述べることができていた。

おじいさんの「三年とうげで二度と転びたくない」等の葛藤も、児童は深く「読む」ことができていた。

また、おじいさんの気持ちを理解するための手段として、挿絵が効果的に働いていた。挿絵は、おじいさんの嬉しそうな顔が描かれていて、一回目に転んでしまった時の表情と違うことを指摘し、そこからおじいさんの気持ちを考えてワークシートに表出した児童もいた。

今回の活動は、自己の考えをワークシートに記入し、それをもとに発表を行うという学習活動を通して、対人的なコミュニケーションを行う上で、話し手が自己の思いや考えを明確にしてから聞き手に伝えることを、疑似的に体験することを目的としているものであった。

児童たちは、行動を起こす前に一時でも考える時間があることが、コミュニケーションを行う上でも大切であることを少しでも感じたのではないだろうか。

2つ目の活動として、本時で取り扱う場面を児童とともに内容の理解を深める活動を行った。本時における「逸脱」の読みは、児童の世界観を再構築することができていた。

「逸脱」から児童の中に新しい世界観が展開されることが、文学的文章の「読み」の授業において必要なのである。

今回の授業実践では、明らかになった「逸脱」は一通りのみだったが、幾通りかの「逸脱」した読みが表れる場面を設定することも、今回の授業実践とは異なった【他者とのかかわり】を生み出す可能性がある。そうすることで、児童がさらに新しいかたちの【他者とのかかわり】

を行う機会になりうる。今回の授業実践においても、そのような可能性はなかったのか検討する価値はあるだろう。

Ⅳ 総括と今後の課題

文学的文章の「読み」の授業において、児童は多くの対象とコミュニケーションをとり、授業実践を重ねていくことで、ワークシートに表出される言葉や授業における発言に変容が見られた。これらの活動を有益なものとするすることで、児童のコミュニケーション能力を育成する可能性を見出すことができた。

以上まで、文学的文章の「読み」の授業について考えてきたが、本研究は文学的文章に限定しており、「読むこと」領域には、まだ多くの教材がある。国語科における他の領域からもコミュニケーション能力の育成の方法、ないし可能性を見出す必要がある。

本研究の成果を、他の教材や領域に応用していき、新たなコミュニケーション能力の育成を目指す授業を展開していかなければならない。

また、本研究は、学習活動としてのコミュニケーションとして、特に国語科の授業のことにについて述べてきたが、児童が言葉の教育を受けるのは授業時間が全てではない。

言葉やコミュニケーションの指導は国語科にとって重要な指導内容・項目であり、それらが意識的・意図的に行われなければならない。しかし、国語科と相まって、他の教科や教科以外の活動（道徳、外国語活動等）を含む学校生活全体を見通し、言語環境を整え、児童が十分にコミュニケーションを行うことのできる状態を造る必要がある。

修学指導教員 吉川 芳則
指導教員 吉川 芳則